

B1. 国際研究協力を推進する外国人研究者等宿泊施設

東北大学 片平北門会館



南側外観



学生用居室



学生用オープンリビング



研究者（単身）用居室



研究者（夫婦）用居室

日本に不慣れな外国人研究者が安心して研究に打ち込める環境をユーザー参加型の設計プロセスで整備。居住部分と福利厚生部分を区分し、交流と居住性に配慮。

■世界トップレベルの外国人研究者を招へいする基盤整備

東北大学の更なる国際化を推進するための外国人研究者向け長期滞在宿泊施設である。日本に不慣れな外国人研究者でも安心して研究に打ち込める環境を構築するため、宿舍と福利厚生施設を一体的に整備した。東北大学は、「世界リーディング・ユニバーシティ」を目指しており、その決意を公表した「井上プラン2007-東北大学アクションプラン2009年度改訂版」の戦略実行プランに沿った施設整備である。

■ユーザー参加型の設計プロセス

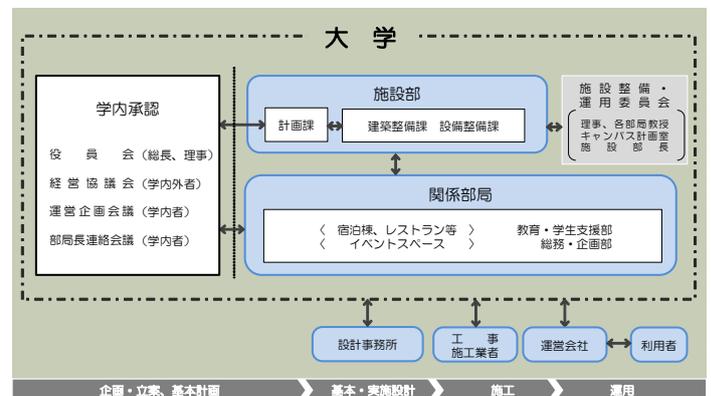
○推進体制の構築

施設部と関係部局によるプロジェクトチームを中心として、建物利用者や管理者も含めたユーザー参加型の推進体制を構築した。企画・立案、基本計画の段階では、施設部と関係する主体部局である教育・学生支援部、総務・企画部によって企画書等を作成し、学内の承認手続に沿って学内合意を図るための調整を行った。基本・実施設計段階では、施設部によって、運用管理を行う関係部局へのヒアリングを実施した。本施設が居住空間、レストラン、売店空間等の複合施設であることから、その成否はゾーニングにあると判断し、より効果的なゾーニングを平面ダイアグラムにて練り上げ、関係部局へ提案する等、相互に意思疎通を図りながら設計プロセスを推進した。また、施設整備・運用委員会によってキャンパスマスタープランに対する確認と調整を行った。

○運用上の取り組み

管理人には、英会話能力のある者を選任し、24時間入居者のサポートに当たっている。また、公益財団法人宮城県国際化協会と連携し、外国人向けの日本語講座や各種イベント等の案内を随時行うなど異文化交流促進の取り組みを行い、外国人研究者及びその家族が、日本に親しむための支援を行っている。

2階のイベントスペースは、東北大学ウェブサイトからの申



設計プロセスと推進体制図



にぎわうレストラン



2階イベントスペース

込みによって学外へも開放しており、東北大学の記者会見や学会、その他社会連携事業等に活用されている。

■ロビーを中心としたハブ型動線と開放的な空間設計

3階以上を居住者のみが入り出できる住居部分とし、1・2階を居住者の他に一般利用も自由に入り出できる福利厚生施設及びイベントスペースとしている。

1・2階部分は、中央にロビーを配して、その東西にレストランと売店及びイベントスペース、また、1階南北にテラスと中庭を設け、直接の往来も可能とした。このことにより、各施設間を移動する居住者や一般利用者が中央のロビーで自然に触れ合い、交流のきっかけとなるよう工夫している。また、ロビーやテラス周辺では、小規模なイベント開催も可能とし、行き交う人々の癒やしの空間として活用できる。また、周辺に立地する研究所に勤める最先端を担う研究者が心身を休めながら交流し、刺激し合える空間とした。

■学生向け居住スペース(ユニバーシティ・ハウス型)

学生向けの居住スペースは、8戸の居室にオープンリビングとサニタリースペースのセットを1ユニットとするユニバーシティ・ハウス型とし、日本人学生と留学生が混住することで多文化共生の育成を促す。3階のスチューデントラウンジは、ユニットや階を超えた学生の交流を促す場として自由に利用できるスペースとし、また、6～8階の研究者も利用可能とした。

■利用しやすい、人に優しいデザイン

建物内の案内に配慮するとともに、車椅子での利用も考慮するなど、ユニバーサルデザインを積極的に導入した。また各室生活必需品となる家具(冷蔵庫、電子レンジ、机、椅子、ベッド等)はあらかじめ備品として据え付け、日本に不慣れな研究者や留学生でも気軽に日本での生活をスタートできるよう配慮している。

■将来の改修を見越した設計

構造体と設備の寿命差による将来の設備改修や内装改修、日常のメンテナンス性を考慮し、スケルトンとインフィルを明確に分離することを念頭に設計。PSやDSといった設備スペースは共通部分から直接アクセス可能な設計とし、メンテナンス性を向上すると同時に改修による住居部分やイベントスペース等への影響を最小限に抑えた。

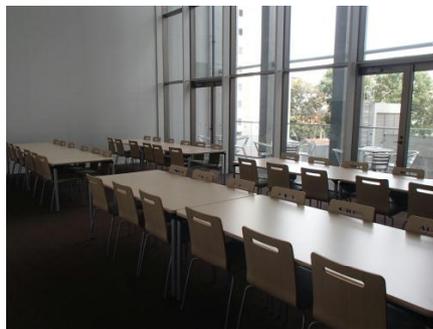
■安全・安心な居住空間

防犯のため住居部分と外部の境界には、非接触式ICカードリーダーと連動する電気錠を設けた。入場時には、カードキーによるチェックを必要とし、各電気錠の状態は管理室に設置した集合盤で把握、遠隔操作も可能とした。災害時には、管理室からの一斉解錠も可能。エントランスをはじめ要所に防犯カメラを設け、管理室のモニタから定点確認を行っている。また、居住部分のエントランス脇には、宿泊室のある管理室を設け、管理人及び警備会社による24時間体制での入居者対応を行っている。

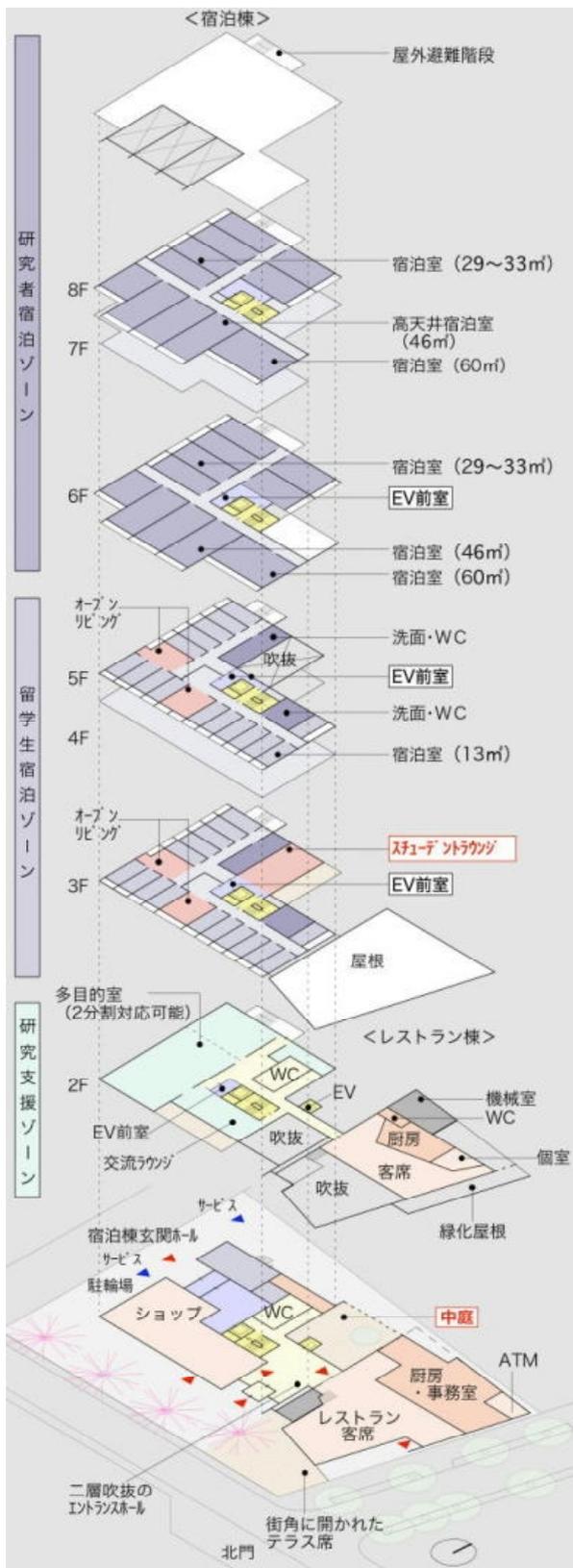
震災等の非常時対応に不慣れな居住者も少なくないと考えられることから、災害時の混乱による二次的災害を最小限に抑えるため、居住者向けの防災訓練を実施している。

■自然光の利用と省エネルギー

窓の開口面積を大きく取り自然光を積極的に利用するとともに、共用部は、LED照明を採用、人感センサーによる照明制御を行い、省エネルギーとランニングコスト低減を図った。



学生が自由に利用できるスチューデントラウンジ



平面ダイアグラム

B2. グローバル化を加速する「国際交流村」の留学生寮

名古屋大学 インターナショナルレジデンス山手サウス



南側外観



個室

渡り廊下



オープンリビング

大学のグローバル化を加速する国際交流村に、優秀な留学生の受入れに全学的に取り組み、ルームシェア型の留学生寮を整備。

■グローバル化加速のための基盤強化

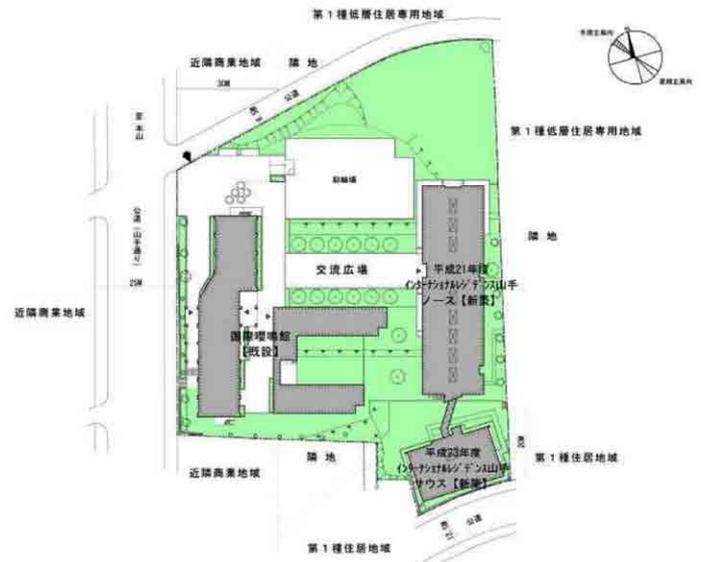
国際化拠点整備事業（グローバル30）や博士課程教育リーディングプログラム（法制度設計・国際制度移植専門家の養成プログラム）、大学の世界展開力強化事業（キャンパス・アジア中核拠点形成支援）、世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）などに採択され、海外との交流が加速度的に伸びている。特に、グローバル30では、平成32年度までに留学生3,000人計画を掲げており、留学生が飛躍的に増加していることから、留学生宿舎不足が顕著な状況となっている。

山手団地には、日本人学生と留学生が混住している国際喫煙館（おうめいかん）を建設しているが、更なる国際交流を促進する環境を整えることを目的に、山手団地を国際交流村と位置付けて、平成21年度にインターナショナルレジデンス山手ノースを建設するとともに、平成23年度にインターナショナルレジデンス山手サウスを建設した。

■優秀な留学生の戦略的受入れのための全学的取組

積極的な留学生の受入れを行う状況において、留学生宿舎の絶対数の不足により、一部の留学生は、渡日直後から民間宿舎に入居させざるを得ない状況となり、また、名古屋大学短期交換留学受入れプログラムへの応募者も、年々増加する中でやむを得ず入居制限をせざるを得ない状況となっていた。このことから、留学生の勉学環境を確保するとともに、安心した留学生生活を保障し、名古屋大学の留学生教育の充実を図るために、平成20年12月の役員会において学内予算（目的積立金）による留学生宿舎整備が決定し、インターナショナルレジデンス山手ノース及びサウスが整備されることとなった。

役員会における整備事業の決定後、基本計画・設計を策定するため、予算の管理・統括を図る財務部、利用者・建物管理部局である国際部、同じ山手団地にある国際喫煙館に関する学



国際交流村配置図



設計プロセスと推進体制図



南西側外観（山手ノース）



山手ノースへのアプローチ（交流広場）

務部が日本人学生宿舎担当の立場から、施設整備・防災担当として施設管理部が参画し、推進体制が構築された。この体制のもと、情報共有を図りながら、具体的な規模や事業費、工程等を把握し、基本計画・設計を策定し、学内の経営層への合意形成を図った。

実施設計では、この推進体制に設計事務所が加わり、行政と協議・調整を図りながら詳細な設計を行っていった。また、同時に近隣住民にも施設管理部から計画内容について説明を行い、整備計画への理解を得た。

施工段階では、さらに、施工者が推進体制に加わり、要求性能を担保するべく、推進体制の関係部局と協議・確認を行いながら施工を行った。

■異文化交流を促す計画

○交流スペースの共同利用

施設の配置は、ノースの建物内中央の外部廊下からサウスの渡り廊下へつながる計画になっており、国際交流村として一体感を演出するものとなっている。

交流スペースについてもノースに設けられている多目的室や3層吹き抜けの開放的な中央廊下などのスペースを共同利用することとしており、国際喫煙館を含め国際交流村全体で異文化交流を促す計画となっている。また、ノースのエントランスへ向かう幅20mのアプローチ（交流広場）は、屋外の交流空間としても機能している。

○ルームシェア形式

平面計画については、名古屋大学初のルームシェア型の留学生宿舎として8室1ユニットを共同生活の単位とした7フロア14ユニットの入居数112名を確保した。共用スペースには、オープンリビングを設け、国際交流を促す計画となっている。

■留学生活の安心・安全に配慮した計画

防犯面においては、外部からのアクセスを隣接するノースのエントランスに統一することで、管理面での効率化が図られ、セキュリティの強化を図っている。さらに、ユニットごとに玄関を設け、施錠ができるようにしており、また、建物中央に上下階を見通すことができる光庭を設け、安全性・防犯性に配慮した平面計画とした。

■省エネルギーへの配慮により、留学生への負担を軽減

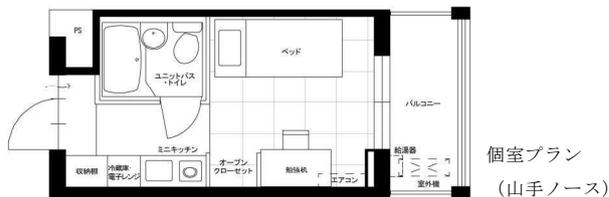
高断熱化・複層ガラス・屋根の遮熱シート防水の採用、また、建物中央に配置した光庭の煙突効果による自然換気を取り入れるなど、積極的な省エネルギー化を図っている。加えて、LED照明を採用するなどオール電化とし、光熱費を最小限に抑え、留学生の費用負担の軽減にも配慮した計画とした。

■周辺環境と調和した景観

今回の建設地は、名古屋市の指定する「風致地区」に該当しており、樹木や地被植物など積極的な緑化を図るとともに、外壁の色彩等、意匠においても既存建物や周辺環境と調和した良好な都市環境の形成に寄与している。

■国際交流の活性化によるグローバル人材の育成

名古屋大学初のルームシェア型の宿舎であり、試験的な試みではあったが、安心して留学生生活をスタートできるとともに、多国籍交流を促し充実した留学生生活を送ることに寄与しており、居住者へのアンケートでも、94%が満足していると回答している。このアンケート結果が、名古屋大学の今後の留学生宿舎増築計画において、ルームシェア型整備への機運を高め、日本人学生も含めた国際交流を更に促し、グローバルに活躍する人材を育成する環境形成への足掛かりとなった。



個室プラン
(山手ノース)



平面図



建物中央に光庭を設け、やわらかな光を取り込むことで明るい雰囲気演出している共用スペース



開放的な中央廊下 (山手ノース)



多目的室 (山手ノース)



渡り廊下で結ばれる山手サウス (中央) と山手ノース (左)

B3. 留学生・外国人研究者支援を推進する国際交流施設

京都大学 吉田国際交流会館



北側外観



上：单身室 下：夫婦用室

吉田キャンパス構内に位置する外国人研究者・留学生宿泊施設。宿泊施設に特化した他の会館とは異なり、講義室、セミナー室、居住者以外の人々も交流ができるラウンジ等を併設。

■国際的共同研究を行うための教育と研究のシームレスな融合

「留学生30万人計画」を視野に入れた留学生・外国人研究者支援体制の充実及び、国内外の研究者が相互に交流し国際的な共同研究を行うための魅力ある教育と研究のシームレスな融合拠点整備を目的としている。

留学生や外国人研究者の交流スペースやセミナー室、長期滞在型宿泊施設を併せ持つ施設を整備し、京都大学がもつ最先端の研究資源を生かし、地球社会の課題に挑戦する次世代リーダーの育成を行う。

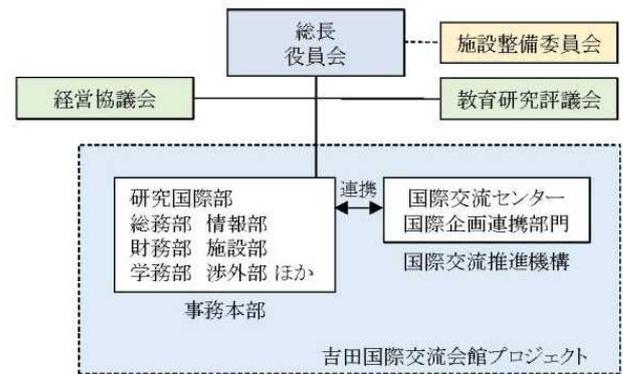
■設計プロセスと推進体制

留学生の住環境を整え、受入れ増を目指す方策のひとつとして、講義室やセミナー室の教育機能と留学生や海外からの研究者の一時宿泊スペースとを併せもつ施設整備の方針が役員会にて示され、検討が始まった。具体的な計画については、事務本部内で調整を図り、施設整備委員会では京都大学第二期重点事業実施計画の一つとして了承を得ている。

基本設計・実施設計においては、留学生や外国人研究者の窓口でもある国際交流課（研究国際部）の要望を施設部で取りまとめ、施設部担当者が設計事務所と連絡調整を行いながら、基本設計書・設計図書を作成を進めた。また、施工の際には、内装仕様の要望や使用想定について国際交流課に確認し、施設部担当者が施工業者と連絡調整を行うことで設計意図の伝達、工事監理を行った。

全学的な国際交流事業及び国際教育の企画及び実施については、国際企画連携部門及び国際交流センターが研究国際部等と連携して行っており、国際交流サービスオフィス（研究国際部）が本施設の運用開始後の施設利用者対応窓口となっている。

本施設の整備に当たっては、4,690㎡のうち国際交流スペース部分の約2,080㎡を施設整備費補助金により整備し、残りの約2,610㎡を自己財源によって整備している。



推進体制図



1階ギャラリー交流スペース



2階共有ラウンジ

■ 研修・宿泊施設としてふさわしい建物計画と交流を促す工夫

2階から4階部分に69室の宿泊スペースを備え、留学生と外国人研究者は、最長一年間まで滞在することができる。

1階と地下1階には、五つの講義室が整備され、主に留学生向けに日本語の授業が行われる。

また、開放的なラウンジやホールを計画し、国境を越えた研究者や学生の交流の場にふさわしい施設環境を整えている。1階のギャラリー交流スペースは各ホールと一体的な空間構成とし、日本文化を発信するような展示を行うとともに、本施設の利用者だけでなく学内の学生や研究者が、講義の合間等に気軽に利用できるオープンなスペースとしている。2階から4階のラウンジは、主に居住者が使用するスペースとして、人の流れが分かるエレベーターホール横に配置し、交流を促す仕掛けとしている。2階の交流ラウンジは炊事場を併設し、小規模なレセプションパーティーができるしつらえとしている。

なお、地下1階のドライエリア部を壁面緑化し、教育施設としての環境整備の充実を図っている。

■ デザインの連続性への配慮

大学施設としての統一性と周辺環境への影響に配慮した外観デザインとしている。

構内の建物に多く見られる基壇部RC+吹きつけとし、屋上外観壁を統一したデザインとしている。外観のアクセントとして、西階段を壁面より突出させたデザインとし、東大路通りからの統一感が演出されている。また、京都の町並みをイメージする縦格子のルーバーを使用し、景観への配慮とともに、学内にある寄宿舎としてのプライバシー確保に配慮している。

■ フレキシビリティの追求

教育内容の変化や間取りの変更に対応するため、外壁・耐震壁・EV・階段などのコア周りは、高耐久なフレームとし、内部は、入替え可能な乾式間仕切りとする、“スケルトン・インフィル”の考え方に基づいて設計している。

■ 環境負荷の低減

○ ゾーン配置

居住環境を考え、太陽高度が低い時間帯における東西方向からの直射を遮るために、南北に居室を配置している。また、中央廊下として面積効率を向上しながら、合理的で明確な平面構成としている。

○ 直射日光の抑制

南側壁面にバルコニーを設けることで、夏季の強い直射日光を抑制している。さらに、ルーバーを設置することで、熱負荷調整を行う。西側壁面にルーバーを設置することで、窓の外で西日などの日射を遮り室内への熱エネルギー流入を効果的に防止する。

○ 自然採光・自然換気

1階ホールの内部吹き抜け上部は、トップライトにより天空光を取り入れることで、共用部の照明負荷を軽減する。トップライトの一部を開閉式とし、自然換気が可能となっている。

○ 豪雨対策

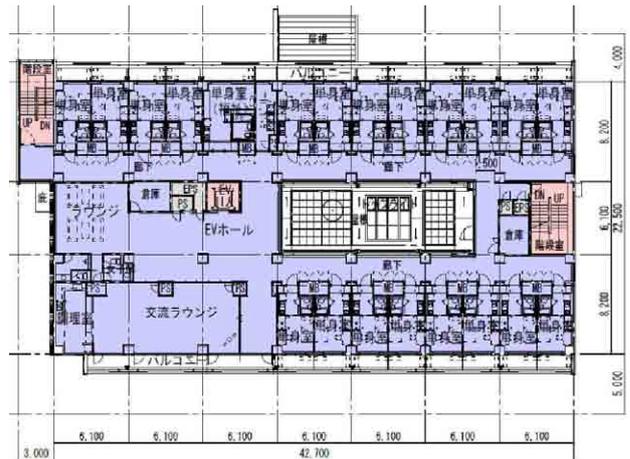
ゲリラ豪雨の際、雨水をドライエリア下部の地下ピットに貯留することで、雨水の急激な流出抑制を図り周辺環境へ配慮している。

■ 高い稼働率

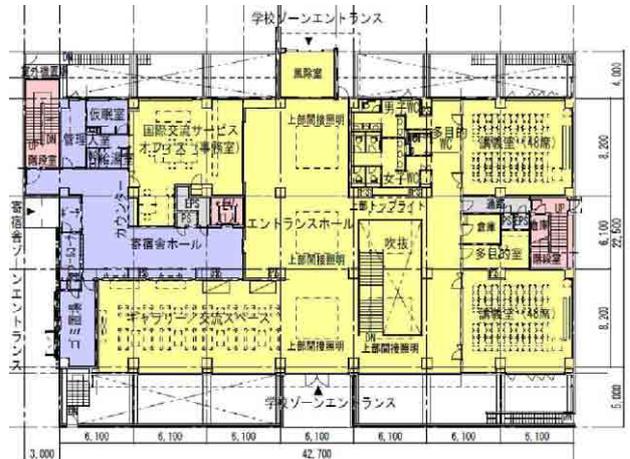
稼働率は運営を始めた平成25年度で86%であり、平成26年度も空き部屋は極めて少なく、特に、研究者向けの居室は入居希望が多いために、入居者の決定が抽選になることもある。



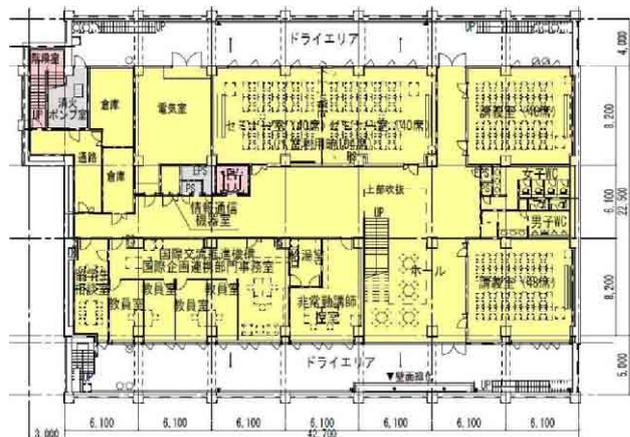
2階交流ラウンジ



2階平面図



1階平面図



B1階平面図

B4. 木のぬくもりと和の雰囲気を感じられる外国人宿泊施設

九州大学 伊都ゲストハウス



南東側外観



夫婦室

国際化に向けた魅力ある拠点創出のため、県の補助事業を利用し、木の魅力を活用するとともに、安全性を確保した施設で、日本文化を体感できるよう計画。

■国際化構想に向けた魅力のある拠点の創出

九州大学伊都キャンパスで実施されている国際規模のプロジェクト、産学連携研究プロジェクトのために来訪する外国人研究者等の宿泊施設として計画。国際化構想に向けた魅力のある拠点を創出するための整備である。

また、整備費の約1/2を補助金とする「平成22年度福岡県森林整備加速化・林業再生事業」に採択され、木造公共施設として地域材（福岡県産）の利用を喚起し、木材の需要のさらなる拡大につなげ広く普及することも目的としている。

■設計プロセス

○企画・立案

伊都キャンパスでは、国内外から数多くの研究者が来訪することが見込まれているが、その中で、研究者の宿泊施設、特に外国人研究者用の宿泊施設が不足している状況にある。

また、(財)九州大学学術研究都市推進機構が、九州大学学術研究都市構想の実現に向けて、本キャンパスを中心に産学連携施設や企業を誘致しているところであるが、研究者間の交流支援促進を図る施設が不足している状況にある。

これらにより、研究者宿泊及び交流施設の整備が急務であったため、福岡県「福岡県森林整備加速化・林業再生事業」の補助を活用し、大学の使命である地域貢献を果たすに至った。

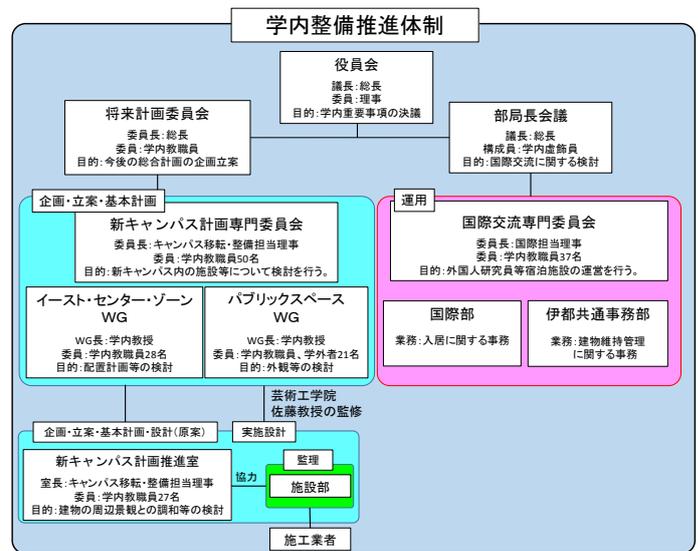
○基本計画

整備に当たっては、「九州大学 新キャンパス・マスタープラン2001」及び「九州大学 センター地区基本設計」との整合を図るとともに、新キャンパス計画専門委員会で配置を決定した。

○基本・実施設計

「和の雰囲気を感じられる施設」を設計コンセプトに掲げ、パブリックスペースWG長である佐藤優教授（芸術工学院所属）より設計の監修を受け、新キャンパス計画推進室の協力のもと、設計を進めた。

本検討内容を新キャンパス計画専門委員会で審議の上、役員会へ報告し、整備を開始した。



設計に併せて、日常家具の選定を関係部局により行い、施設利用料や運営方針等の施設運営にかかわる事項とともに国際交流専門委員会にて決定した。

○運用

建物完成後の管理運営は、国際交流専門委員会のもと、入居に関する実務を国際部が、建物維持管理に関する実務を伊都共通事務部が実施している。

入居者である外国人研究者及び留学生に対する支援のワンストップサービス窓口として「外国人留学生・研究者サポートセンター」を設置しているが、本施設においても一部分の業務を担っており、渡日のための諸手続、渡日時の出迎えや案内、HPによる情報提供各種掲示物等の英語化、さらに、英語による事務強化を関係部局や学外関係機関と連携して実施している。

また、運営に関する質の向上や、今後、利用者のニーズに沿った施設整備に役立てるよう、入居者に利用状況調査を実施したところ、安全性や共用部分の居住性で高評価を得るとともに、満足75%、やや満足12%で計87%となるなど、本施設についておおむね満足との結果が得られた。

■研究者間の交流促進が生まれる宿泊施設

異分野、多国籍の研究者等が自然に集まってディスカッションができ、研究活動の活性化を図ることを目指して、各フロアの通過動線にタイプの違うたまり場を複数配置し、さらに、居住者用エリアには、大きめの共用キッチンを設けた。

■快適性への配慮

多様な人が円滑に利用できるように吹き抜け空間を中心に視線の抜けを考慮した設計とし視認性を高め、廊下の突き当たりには必ず窓を設置し、その先には庭園や伊都キャンパスの緑が望めるような計画としている。吹き抜けには熱上昇による自然通風機能を持たせ、吹き抜け下の中庭には必ず木陰ができるよう計画し夏場でも涼しく快適な空間となるよう計画している。

また、身障者の方も入居可能な福祉対応住戸を設ける等のバリアフリーに配慮した設計を行い、様々な人が快適に利用できるよう計画している。

■多様な用途に対応できる利便性のある施設

共用エリアゾーンを明確にすることで、一般者も宿泊者の居住環境を損なわずに多目的ホール、会議室を利用でき、居住者のミーティングのみならず学内の様々な行事に利用できるスペースとしている。また、各フロアには、談話エリア、コーナーを複数用意し、小規模単位の打合せが集中しても対応できるようにしている。さらに、1階には、茶室の機能を付加した和室タイプの打合せ室を設け、茶道等の課外活動にも対応できるようにしている。

■大規模木造建築物の安全性の確保と環境への配慮

比較的容易に調達できる15 cm角程度の製材を拡張樹脂アンカー工法によりつなぎ合わせ、大断面の柱、梁（はり）にすることで、強固な大規模木造建築を実現している。また、無垢（むく）の木材素材の良さをそのまま表現できる燃えしろ設計を行うことで、大規模木造建築物において、防火上も優れた準耐火建築物を実現している。木材活用の可能性と素材の美しさを最大限に引き出すことにより、木材利用の普及促進効果が高い施設となっている。

■オール電化

居室機能としては、安全制の高いIH調理器、省エネルギー性に優れた高効率ルームエアコン、エコキュート等を設置しオール電化としている。



2階平面図



配置図兼1階平面図



1階談話ホール



1階談話コーナーと中庭



2階談話ホール



多目的ホール



和室（茶室）

B5. 24時間365日利用できるブックコロシウム

国際教養大学 中嶋記念図書館(L棟)



西側外観



内観 (グレートホール)

国際化に向けた拠点を創出し、閑静で豊かな森と秋田杉による濃密な木造空間により、杜の図書館を実現。

■学習意欲を喚起する空間の創出

秋田市の南に位置し、閑静で豊かな森に囲まれている。平成16年に開学以来、英語による講義を行う独自のカリキュラムを展開している。

キャンパス整備計画の一つとして計画された当図書館のコンセプトは、学生たちが本と戦う場「ブックコロシウム」である。設計者による長年の成育環境の研究から導かれた、意欲を喚起する空間の原則「遊環構造」が適応され、学習意欲を喚起する空間の実現が試みられた。半円形状で段々状の書棚と閲覧席は円の中央から見上げるように構成され、たくさんの「知」が用意されていることを体感させ、本を探索する楽しさを環境的に提供している。

地元の秋田杉を徹底的に活用した、ハイブリッド木構造による大学の象徴となる建物である。

■杜の図書館

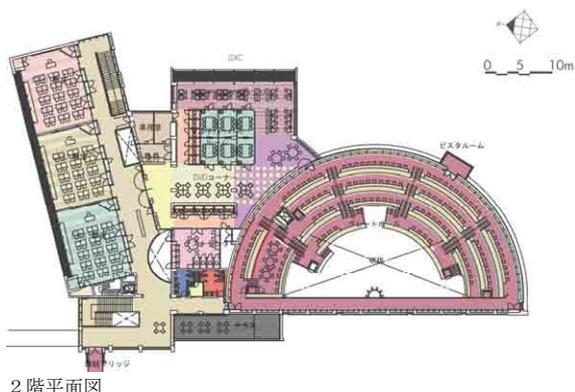
設計に際し、緑あふれるキャンパスの景観に調和することが求められた。緑を残すように図書館を配し、周辺環境に調和した景観を形成するように配慮した。

周りの既存樹木は、建物への日差しを遮りつつ、室内からはリラックスできる緑の景観を構成している。窓から見える緑の景色と、秋田杉による濃密な木造空間により「杜の図書館」を実現している。

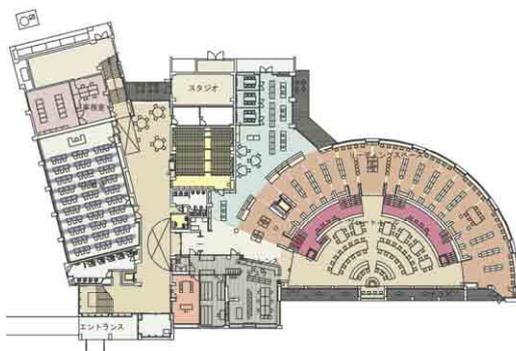
■能動的学修支援センター(ALSC)

2013年9月、グローバル人材育成推進事業の一つとして、これまでの言語異文化学修センター(LDIC)、学修達成センター(AAC)に加え、アカデミック・キャリア支援センター(ACSC)を新設し、これらの三つのセンターを総称し、能動的学修支援センター(ALSC)として開所した。ALSCでは、学生の学修意欲を高め、主体的かつ能動的に学べるよう、様々なサポートを提供する。

LDICは、学生が興味のある外国語を計画的に自主学習できる施設である。英語だけでなく、例えば履修している外国語科目



2階平面図



1階平面図



LDIC (DVDブース)



LDIC (スピーキングルーム)



AAC



ACSC

の学習に利用など、留学の準備として現地の言語を学ぶことができる。

AACは、個々の学生の能力を最大限に引き出すとともに、学習目標を達成するために必要なサポートを提供している。

ACSCは、大学院進学を検討・予定している学部学生に対して、相談や各種イベントを通じて支援を行っている。

■いつでも利用できるIT教室

三つのIT教室（コンピュータールーム）があり、合計150台のコンピュータ（Windows OS）が設置されている。

三つのIT教室のうち、1教室は、図書館と同様、在学生が24時間365日利用できる。

そのため、プレゼンや作文などの授業の課題に取り組んだり、離れて暮らす家族や海外に留学中の仲間との交流を楽しんだり、大学生活には欠かすことのできない施設となっている。

■快適性・利便生への配慮

○グレートホール

半円形の平面形状で段状の断面をもつグレートホールは、円の中央部分から全ての本棚を見渡すことができ、円の中央部分に設けられた検索コーナーから本の位置を見つけることができる。

○閲覧席

利用者は、思い思いに本棚を巡り、気に入った場所で閲覧することができる。閲覧席は、大空間の中にありながら落ち着いたスペースとなっている。一方、他の学生の様子も窺（うかが）えるので、お互いに学習意欲が喚起され、集中しやすい環境を実現している。

○3種類の椅子

椅子は3種類を用意し、座高によって座面の色を変えることにより、体格や学習用途に合った椅子を容易に見つけることができる。

○体の不自由な方への配慮

エレベータと階段昇降機により各フロアへ車椅子での移動が可能となっており、体の不自由な方への配慮も十分に行われている。

■可変性の確保

図書館内1階のグループ学習室は、ふだんは3部屋に仕切られ、2名から6名程度の少人数活動に利用されているが、間仕切りを可変式にしているため、20名程度の大人数にも対応可能となっている。

※少人数使用時（学生と留学生、1対1の勉強等）

※大人数時（ホワイトボードを使ったグループ討議等）

■安全な施設環境

半円形プランを持つ大学図書館の広い空間に、秋田県産スキの製材を使った放射構造の屋根を架け渡している。

また、積雪対策としては、屋根に滞雪させる計画をしており、150cmの積雪に対して十分な構造耐力を持つよう計画している。

■環境配慮型施設

最大の特徴は、24時間利用施設であることから、照明電力の省力化は重要な課題である。

日中は極力自然光を取り入れ、夜間はタスク・アンビエント照明の考え方を取り入れている。

上部の木造を照らす照明や、階段脇の書架照明等をベース照明として計画し、読書や学習に必要な卓上照明は各机にて個別制御できるように配慮している。

また本棚の照明も、ブロックごとに個別点灯ができる。



1階IT教室



グレートホール



グレートホール閲覧席
書架下の帯状のカラーで
テーマごとに書籍を分類



背板を引き倒すことで自然採光と机の機能が生まれる書架



1階
リーディングスペース



1階グループ学習室